

か  
り  
ん

上

松原敏春



か  
り  
ん

上

松原敏春

角川書店

## かりん（上）

1994年3月5日 初版発行

著 者——松原敏春

発行者——角川歴彦

発行所——株式会社角川書店



〒102 東京都千代田区富士見2-13-3

振替 東京 3-195208

Phone：営業部▶03-3817-8521

編集部▶03-3817-8451

印刷所——横山印刷株式会社

製本所——株式会社宮田製本所

●定価はカバーに明記してあります。

●落丁・乱丁本はご面倒でも角川ブック・サービス宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えいたします。

© Printed in Japan ISBN4-04-872799-0 C0093

¥1,300-

かりん  
(上)・目次

|     |             |     |
|-----|-------------|-----|
| 第一章 | 出会い         | 七   |
| 第二章 | ゴーイング・マイウェイ | 二三  |
| 第三章 | 星空映画会       | 三九  |
| 第四章 | カルメン        | 五三  |
| 第五章 | 二通の手紙       | 七〇  |
| 第六章 | 卒業          | 九一  |
| 第七章 | 母の秘密        | 一〇八 |

第八章 東京——一二五

第九章 詐欺師——一四二

第十章 眠れない夜——一五九

第十一章 行かないで——一七九

第十二章 人生と呼べる人生——二〇一

第十三章 東亜クラブ——二一九



かりん  
(上)



## 第一章 出会い

千晶<sup>ちあき</sup>は諏訪<sup>すわ</sup>大社<sup>たいしゃ</sup>の御柱<sup>おんぎら</sup>の前に立っていた。

「御柱さま、本当にいいんでしょうか。私、不安で心配なんです。でも今更、変えられないですよね。そう、とくに決めたことなんですものね。わかりました。頑張ります。ですから御柱さま、私を見守っていて下さい」

千晶は時々こうしてこの諏訪大社の上社<sup>かみしゃ</sup>にやって来ては御柱に話しかける。これは誰に教わったでもない幼い頃からの儀式のようなものであった。昭和二十三年四月、長野県諏訪市でも新制高校が発足し、男女共学が始まるうとしていた。それまでは男子生徒ばかりの旧制中学と女生徒ばかりの高等女学校にはっきり区別されて、男女が席を同じくすることはおろか、口をきくことさえ、はばかられる雰囲気であった。まして千晶が行こうとしている新制桜ヶ丘<sup>さくらがおか</sup>高校は、前身の旧制中学時代はパンカラで知られた学校であった。そんな学校に行つて、果たし

てやっていけるのだろうか。千晶の不安はそこにあった。

諏訪大社の御柱は七年に一度開かれる大祭の時、遠く八ヶ岳やがたけの中腹から引き出されて来た四本の樅もみの大木を神社の四方に立てたものであった。それは諏訪に生きる人々の祈りと情熱の象徴であった。いま諏訪大社の境内には春の木漏れ日が優しく射している。神が宿るといわれる御柱が千晶とこれから繰り広げられる長い千晶の人生を暖かく見守っているかのようであった。

千晶が家に帰ると父の友行ともゆきの研究室から呼ぶ声が聞こえた。

「いよいよ、松風が完成しそうなんだよ。いまから最終実験をやるんで、おまえに是非見せてやろうと思ってる」

母の晶子あきこも期待に胸をふくらませて見守っていた。

千晶の家は創業文政元年以来、百三十年続いた信州味噌しんしゅうみその老舗らひせであった。その老舗にも戦中戦後の時代の荒波が押し寄せていた。戦後の食糧難のなかで、味噌の主原料たる丸大豆はほとんど手に入らず、配給で割り当てられるのは専ら大豆粉もつばという油を抜いた残りカスのだ豆の粉であった。大豆粉のままでは煮てもうまく味噌にならない。そこで何とかしようと、千晶の父・友行は大豆粉を豆状に固める「松風整粒機」なるものの開発に取り組んでいたのである。友行が松風整粒機のハンドルを力強く回す。千晶が上から水を注ぐともうもうたる粉が舞い上がって思わずむせそうになった。千晶も晶子も心のなかで「松風、頑張れ。松風、頑張れ」と叫んだ。友行は自慢げに固まって丸大豆のようになった大豆粉の粒を千晶たちに見せた。実

験は成功した。

その晩、一家のそろった食卓で友行は、祖父の弥之助に松風整粒機の完成を誇らしく報告した。

「そんなことより明日に迫った諏訪味噌組合の組合長選挙で当選する自信があるのか、どうなのかだ」

弥之助は不機嫌に聞いた。

「まあ、無いといえば嘘になるし、あると言ってしまうと駄目な時、引っ込みがなくなるし」

「あります。あるわ。無くてどうするんです。わたしが全部、根回しもやったんだし」

晶子がややムキになって弥之助に反論した。

「いくらGHQ（連合軍総司令部）の味噌指令とはいえ、麦だ？ さつまいもだ？ そんなもん混ぜて、しかも油を抜いた大豆粉で旨い味噌が作れると思うかい？ そういう味噌業界の非常時にだ、今度は、友さん、おまえさんが味噌業界をまとめていかなきゃならんのだよ。趣味で妙な機械を作つとる場合じゃねえすら」

杜氏見習としてこの小森屋に入り、四十年余り味噌一筋にかけてきた弥之助にとって、同じ婿養子とはいえ友行はどうも頼りなく思われるのであった。

「そういえば、千晶、新制桜ヶ丘高校開校式での挨拶、もう書き上げたの。開校式はあさって

よ。全校生徒の前で挨拶するんでしよう。それも男の子ばかりの前で」

祖母の晶乃が話題を変えて助け船を出そうとした。

「わしは千晶が高校に行くことにはもともと反対だったんだ。女は諏訪高等女学校で十分だ。わざわざ男共ばかりの処に行かせることはねえずら」

弥之助はますます不機嫌になってしまった。

「とにかく、今は時代が変わったんです。女だからって引っ込んでる必要はないわ。千晶には自由に未来を選んで欲しいんです」

晶子は弥之助に言うともなく千晶に言うともなく、呟いた。

「わたしは——新制高校で——頑張ります」

その時まで黙って皆の話を聞いていた千晶は自らを励ますように、家族全員に対して決意を表明するように力強く言い放った。

千晶が桜ヶ丘高校へ行く前の晩、祖母の晶乃が千晶の部屋を訪れた。

「この筆箱はね、わたしが御父様からいただいたものなの。これを持っていればあなたの曾御祖父様がいづでも守って下さるわ」

晶乃は古い筆箱を千晶に手渡した。

「あのね、千晶。お母さんがあなたをどうしても桜ヶ丘高校に入れたかったのはね。一日も早く男の人達の中でもまれて一日も早く強くてたくましい女に成長して欲しかったからなの」

「強くてたくましいなんて、そんな私」

「ううん、心のことを言っているの。精神、スピリット。千晶には新しい時代にふさわしい『新しい女性』になつて欲しいの」

「新しい女性ってどういうこと？」

「それはあなたの課題よ、千晶」

「新しい女性かあ」

千晶はこれから起こるであろう高校生活のさまざまな出来事に思いを馳<sup>は</sup>せた。

そしていよいよ記念すべき朝がやってきた。桜ヶ丘高校開校式の日である。今では空気や水のように当たり前になってしまった小学校、中学、高校、大学と続く六・三・三・四制も、当時は実に画期的なものであった。そして高校での男女共学も今までは考えられないことであった。それらはみなGHQの民主化政策によって指示されたものであった。

千晶は女学校を五年で終え卒業する筈だったのだが、新制高校となつて一年余分に在学しなければならなくなった。GHQの強い意向で諏訪桜ヶ丘高校ではこの新しく出来た高校三年生のクラスに男女共学を実現させようとした。しかしもともと男子ばかりの学校であったので、隣りにある女学校の生徒に白羽の矢をたて強引に千晶をくどき落して、新しく出来た高校三年生のクラスに編入させたのである。

「諸君には新制桜ヶ丘高校発足初年度の生徒であるという栄えある栄誉が与えられたのである。

その榮譽を汚さぬよう我が校生徒の誇りを胸に大いに研鑽<sup>けんさん</sup>を積んでもらいたい」

演壇では校長が興奮氣味に挨拶<sup>あいさつ</sup>をしている。そして同じ壇上にはGHQと通訳、そして市長などの来賓がずらりと並んでいた。その来賓の中には、諏訪<sup>すわみ</sup>味噌<sup>みそ</sup>業者組合の組合長選挙で辛<sup>から</sup>うじて一票差で組合長に当選した友行も混じっていた。

千晶はどきどきしながら自分の名前が呼ばれるのを待っていた。全校生徒の前で女生徒代表として決意の言葉を述べなければならぬのである。

その時、後ろからグウと腹が鳴る音がした。驚いて振り返った千晶に、田上<sup>たがわ</sup>渉<sup>わたる</sup>はにっこりして話しかけた。

「悪い。寝坊して、朝飯を食えなかつたんだ。久しぶりだな」

千晶は誰だか思い出せなかつた。どこかで会ったことがある、誰だろうと考えている時、教頭が次の式次第を言った。

「次に生徒代表、決意の言葉。三年、花山<sup>はなやま</sup>信太<sup>しんた</sup>。同じく、小森千晶」

千晶と信太は同時に壇上中央に向かった。そして二人は演壇に向かつて並ぶと信太がまず最初に決意の言葉を読み始めた。信太は千晶の父の友行が組合長戦で一票差で破った対抗馬、花山<sup>しんきち</sup>信吉の息子であった。花山信吉は新興の味噌屋で何かにつけて老舗<sup>らひせ</sup>の小森屋に対抗意識を燃やしているのだった。

「風薫<sup>かお</sup>る今日の良き日に新制桜ヶ丘高校の生徒として、新しい第一歩を踏み出すことが出来ますことは、我々生徒一同、大いなる喜びであります。また、我が校初めての女生徒には、その

学力面における実力が、我が男子生徒の良き刺激となり、更に本校の輝かしい発展のための躍進力となりますよう大いに期待しています。生徒代表、花山信太」

信太は最後の一節を嫌味たっぷりに言うときさきと壇上を下りて元いた自分の場所に戻ってしまった。本当は千晶が決意の言葉を述べる間、隣で聞いていなければならないことになっていたのである。打ち合わせた段取りと違って、千晶はすっかりあがってしまった。気を取り直して、草稿を読み始めようとした瞬間、演壇の下の方が、パカリと開いて蛙が数匹飛び出し、千晶の足に絡みついた。これは信太とその仲間たちが最初から千晶を脅かそうとして仕組んだ悪戯であつた。ピョンピョン飛び回る蛙にドツと生徒たちが笑いだした。その笑い声に千晶はますますあがつてしまい何が何だか分からなくなつてしまった。何とか気を落ち着けて草稿を読もうとするが声が出ない。

重苦しい沈黙が続き、場内がざわざわしてきた。

その時、生徒の中にいた一人の女生徒が進み出て壇上の千晶の隣に立つた。負けん気をうちに秘めた瞳が美しいきりりとした美少女である。千晶と共に桜ヶ丘高校に入ってきたもう一人の女生徒、本間あかりであつた。

「蛙ぐらいで何よ。しつかりしなさい。私が一緒に読んであげるから。さあ、深呼吸」

あかりは千晶を励ますように微笑んだ。それに答えるように千晶は素直に深呼吸をした。すると不思議なことに気分がすっと納まって、声が出るようになった。

「昭和二十年十二月、我が国で初めて婦人参政権が認められました。これで日本もやっと男女

同権の第一歩を踏み出したのです」

千晶に続いてあかりが読んだ。

「そして、諏訪市においても今日ここに新制高校開校と同時に男女共学が始まり、女性として初めてこの諏訪桜ヶ丘高校生の一員に参加出来たことに心から感謝いたします」

それに続けて更に千晶が、力強く読む。

「新しい時代が来たのです。この新しい時代を男女共に手を携えて勉学に励もうではありませんか」

千晶が書いた草稿はそこまでであったがあかりがアドリブでそれにつけ加えた。

「先程の男子生徒の期待に<sup>こた</sup>えられるよう努力します。先生初め生徒諸君、期待していて下さい。本間あかり」

千晶はそれに引き続いて高らかに自分の名前を言った。

「小森千晶」

静まり返った場内のなかでGHQの来賓が拍手をした。それにつられるように壇上の来賓たちも拍手をする。全校生徒のなかで最初に大きく拍手したのは田上渉であった。その渉の拍手はさざ波のように生徒たちに広がり、やがて全員のわれんばかりの拍手となっていた。

放課後、千晶とあかりは一緒に帰った。

「英語、凄<sup>すご</sup>いのね」